

## 菅生台地周辺における弥生土器編年

—特に後期前半を中心として—

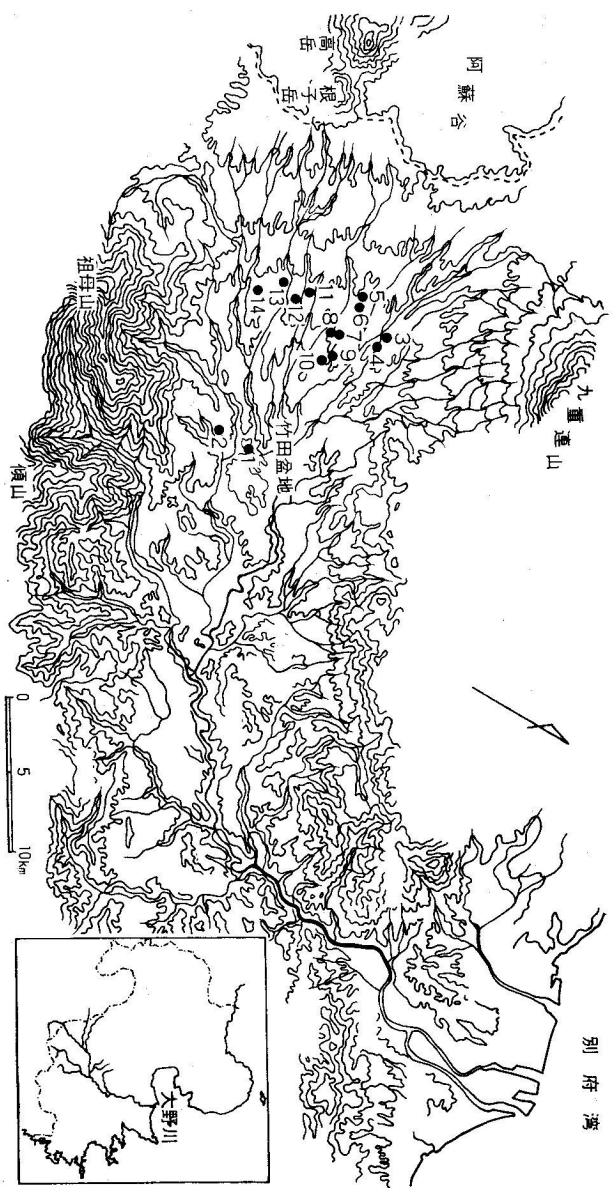
はじめに

小柳和宏

大野川上流域にある竹田市や萩町では、ここ10数年来畑地帯総合土地改良事業に伴う発掘調査が相次ぎ、縄文時代から古墳時代に至る多数の遺跡が発見されている。そこから出土した遺構・遺物は膨大な量にのぼり、県内でも最も資料の蓄積した地域のひとつとなっている。(反面、それだけ多くの遺跡が破壊されたという事であるが…)特に、弥生時代に関しては後期の資料の充実が著しく、その遺跡(ほとんどが竪穴群—集落跡の一部—である)の立地の特異性と合わせて、最近注目を集めてきている。そうした中において、「地方史」を明らかにする上で考古学的な手続きの第一歩である土器の編年研究も、「東九州」、そして「大野川流域」、さらには「大野川上流域」というように、徐々に細かな地域の特徴を明らかにする方向で進展を見せている。将来、大野川上流域の中もさらに幾つかの小地域に細分できる可能性を残しているが、今回は特に調査が多く行われている菅生台地及びその周辺の台地群上の資料を中心として扱う事にしたい。

先ず、研究史をごく簡単に振り返ってみると、当地域の弥生土器に関して本格的な研究がなされたのは、一九七八年の玉永光洋氏による「東九州における弥生式土器研究Ⅰ」<sup>①</sup>が最初である。従来、漠然と弥生時代終末→古式土器と言われてきた波

- 1. 小高野遺跡
- 2. 木田原遺跡
- 3. 内河野遺跡
- 4. 西園遺跡
- 5. 田代東原遺跡
- 6. 平井遺跡
- 7. 石井入口遺跡
- 8. 田頭遺跡
- 9. 小園遺跡
- 10. セツ森古墳群
- 11. 古賀遺跡
- 12. 桑木遺跡
- 13. 中山遺跡
- 14. 仏面遺跡



第1図 遺跡位置図

状文複合口縁壺（安国寺式土器）の系譜とその型式変化を明らかにする事によって、東九州における弥生時代後期土器の地域性の把握と時期区分を行い、ようやく、東九州にも本格的な弥生時代研究が始まったのである。しかし、時期設定にあたり、遺構一括遺物をあまりに重要視した為、一部明らかに同一系列上に位置付けられる土器群（肥厚口縁壺と複合口縁壺）を一時期に扱う結果となり、問題を残した。

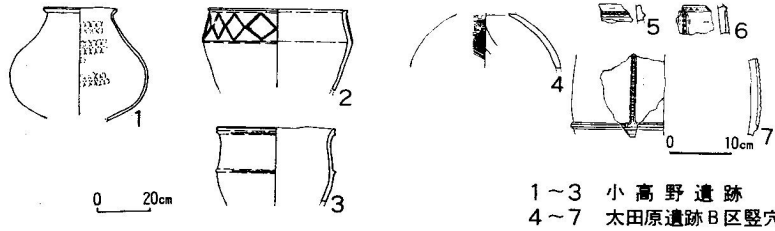
その壺における型式変化を明らかにしたのは芝徹氏である。芝氏は「破棄された鏡片」<sup>③</sup>の中で、大野川中・上流域の弥生土器編年を行い、後期に関してⅠⅡⅣ期を設定した。それぞれの「期」は様式としてとらえるとした上で、各期の意義付けを行っているのは注目される。しかし、この時点では特にⅠ・Ⅱ期の資料が少なく、さらに大野川上・中流域の資料を取りまぜて行っている為、現在蓄積された上流域の資料をもってすれば、やや見直しの必要な部分もあるようである。特に、Ⅱ期は中流域の松木遺跡第34号竪穴一括出土土器の壺を型式学的に並べたものであり、それに伴う他の土器とのセット関係等、新資料による検証が必要である。

そこで、今回はそれらの検討も含め、いわゆる「工字突帯文粗製甕」と呼ばれる、当地域の後期に特徴的な甕の系譜と型式変化を明らかにする事によって、前・中期の様相、さらに後期土器或、立期の様相（即ち芝氏のⅠ・Ⅱ期）を考えてみたいと思う。

### 後期以前の状況

大野川上流域では、以前「空白の過渡期」と呼ばれたように<sup>④</sup>、後期の数百基を越える竪穴の発掘例に比べ、前・中期の遺構の発掘例は少ない。現在、菅生台地の石井入口遺跡で二基の竪穴、祖母山麓の太田原遺跡で中期の集落址が、そして小高野遺跡<sup>⑦</sup>で甕（壺）棺墓が数基と竪穴が一基発掘されている程度である。その他、後期の遺構内や表採等で土器片が出土してはいるが、それでも後期に比べ遺物量は極端に少ない。

東九州地方は、縄文時代晩期刻目突帯文土器の要素を受け継ぐ下城式土器が前期末に成立すると言われてきたが、最近の発掘調査によれば、限られた地域内での盛衰が明らかとなりつつあり、大野川中・上流域では古いとされる口縁部の内湾するタイプのもは今のところ見られない。しかし、それに時期的に前後する土器として、大野川中



第2図 前・中期の土器

・上流域において芝氏は、より縄文晩期刻目突帯文土器の要素を強く持つ「続刻目突帯文土器」の存在を考えている。大野川上流域の資料では小高野遺跡で甕棺として使用されているもの(第2図1、2)があり、その一部は前期末〜中期初頭の様相として認められるであろう。しかし、それらが全て大型で、棺として使用されたものであり、小型の日常土器において今後良好な資料の出土をまって、更に検討を加えたい。

ところで、太田原遺跡では、B区竪穴から「工字文」を成す刻目突帯文を持つ甕(第2図5)が出土し、これは胸部の屈曲が見られず、器壁に雑な磨きが施される等、芝氏の設定した「続刻目突帯文土器」の中でも新しい要素を持った「駒方Ⅲ類」に後出するものと考えられる。共伴遺物では、ハケ調整の球形胴を呈す壺(第2図4)がある。前期までさかのぼるものではなからう。

太田原遺跡では、他にA区竪穴群から肥後型の甕が多く出土し、刻目突帯文土器は残念ながら出土していない。肥後型の甕は、口縁部の上面がほぼ水平をなし三角形、またはU字形を呈し、内面への突出がほとんどない。この特徴は、彼地の甕棺編年<sup>⑨</sup>によれば中期中葉である。共伴する土器は必ずしも良好な出土状態ではなく細片ばかりではあるが、別府湾沿岸地域で中期初頭に下城式土器との共伴が知られる半截竹管文を施す壺がある。上流域ではやや遅くまで残るのかもしれない。

石井入口遺跡第90号堅穴では、肥後の黒髮式土器を伴う土器群（第3図1-8）がある。やや問題の残る土器も含むが、大部分彼地の編年によると中期末に位置付けられる黒髮式土器に伴うものとしてよからう。これには、後期に盛行する工字突帯文粗製甕の直接の祖型ともいえる土器が共伴している。それは、最大径を短く屈曲する口縁部に有し、頸部下に三本の突帯を有し（破片では、それから縦につながるものもある）、あまり張らない胴部からやや広めの平底につながるものである。

ところで、太田原遺跡や、大野川中流域の近中遺跡の表採資料の中に、さらに短く屈曲する口縁部を持ち、外面に雑な磨きが施されたものがあり、型式学的に見て石井入口例のものよりさらに古く位置付けられるのは間違いない。

即ち、今のところ工字突帯文粗製甕が系譜的に直接太田原B区堅穴出土の甕に求められる訳ではないが、前述の表採資料等を介して何らかの関係を想定する事はできるであろう。しかし、突帯の多条化や、口縁部の屈曲（「く」の字口縁化）等、外部からの何らかの影響を考えねばならない問題もあり、今後の課題であろう。

このように、当地域の弥生時代前・中期は土器から見限り縄文時代晩期刻目突帯文土器からの根強い伝統と共に、肥後からの甕、大野川下流域と共通する壺という後述する後期と同様の状況が伺えるもの、未だ定型化した様相は見られない。なお、前期前半に関しては未だ不明であるが、後の根強い縄文晩期的色彩を考えれば、より縄文的要素を有する土器群で構成されていた可能性が高い。少なくとも前・中期を通じて北部九州からの影響は極めて小さいといわざるを得ない。

以上のような前・中期を経て、当地では後期社会を迎える事になるが、その後期の始まりは、土器のセットがまさに定型化を示すようになった時点で求める事ができるであろう。

### 後期初頭～中葉の編年

前述したように、当地域の後期の土器で最も特徴的なものは、工字突帯文粗製甕である。これは現在のところ大野川を下ると中流域ではほとんど見いだせず、阿蘇にも入っていない。しかし祖母山を越えた宮崎県の上流域には同様の甕が出

土しており、<sup>12</sup>何らかのつながりを考える必要がある。

ところでこれらの粗製甕は、突帯で（沈線のものもあるが、主に中流域で見られる。「工」字文を表現し、外面調整にハケを全く使わずナデ調整で、色調はくすんだ茶褐色という共通の要素を持っているものである。突帯の数に注目してみると、頸部下に三本、胴部に一本でそれを縦につなぐもの（以下これを「3-1-1突帯甕」と称す）、同一本、一本で縦につなぐもの（「2-1-1突帯甕」と称す）、同一本、一本で縦につなぐもの（「1-1-1突帯甕」と称す）がある。口縁部の形状や頸部のくびれ（即ち胴部の張り）、底部の形状等も様々であるが、それらの要素を複合して考えた場合、さらに石井入口遺跡第90号竪穴出土のもの等中期の資料を勘案してみても、突帯の数は時間的経過を考える上で重要なポイントのひとつとなり得る。そこで、それぞれのタイプの甕に伴う壺を竪穴一括資料により検討する事によって、一時期を代表するセットを明確にし、それに共伴する外来系の土器の動きを考え合わせながら、それを時期区分の目安にしたいと考える。

3-1-1突帯甕は中山遺跡第14号竪穴、平井遺跡M区3号竪穴、田頭遺跡3G竪穴、内河野遺跡第12号竪穴で出土している。しかし同じこれらの3-1-1突帯甕も、前述した他の要素からみて型式変化を認める事ができる。即ち、平底を持ち口縁部が短く外反する中山遺跡例（第3図10）が古く、他のやや突出した不安定な底部を有し、口縁部が若干伸びぎみになったもの（第3図16）が後出する。

中山遺跡例には、肥厚口縁壺の頸部突帯の部分が伴出しており、それは現状で四本の整美な突帯である。また、ハケ調整の甕（第3図14）も共伴しており、それは口縁部がやや外面に丸味を持ちながらも直線的に「く」の字に折れ開き、胴部は口徑よりも若干上まわる程度に張り、球形胴に近いものである。

後者の田頭・内河野例では、ほぼ共通する要素を持った壺（第3図15）が出土している。それは高橋氏がⅡ期に位置付けたもので、口縁部は肥厚し、外面には連続山形文が施され、頸部下に4〜5本の突帯が巡るものである。また、平井・内河野例では、肥後型の甕（第3図18）が出土している。内河野例では底部のみであるが、両者とも同一型式に属すと思われるもので、

「く」の字に折れる口縁部から最大径を胴上部に持つ胴部につながり、低い脚を持つものである。

ところで、古賀遺跡J区1号竪穴からは、芝氏がI期に位置付けた壺(第3図9)と共に、頸部下に四本、胴部に二本の沈線を施し縦に二本の沈線<sup>⑬</sup>でつなぐ甕が出土している。壺については、3-1突帯甕(新)に伴うものよりも、口縁部や突帯の形状、プロポーション、そして外面調整から明らかに古く位置付けられるもので、ここでは3-1突帯甕(古)との並行関係を考えておきたい。共伴の甕はやや突出ぎみの底部を有し、さらにプロポーションも平井例等に近く、やや新しい時期を与えられよう。

また、3-1沈線甕(第3図17)も仏面遺跡<sup>⑭</sup>から出土しており、形態から3-1突帯甕(新)の時期であると思われるが、この時期既に沈線で描くものが出現している。

このように、3-1突帯甕は二期に分けられるが、中期末に位置付けた石井入口遺跡第90号竪穴出土の甕との間にもう一型式置く事が可能であり、芝氏も指摘しているように古賀遺跡J区1号竪穴の壺を考え合わせても、より中期の様相を持った後期初頭として将来一時期を明確にする必要がある。

次に2-1突帯甕であるが、やはり頸部のくびれ具合等から型式変化を認める事ができる。あまり頸部がくびれず、胴部の大きく張らないものでは、田代東原遺跡第5号竪穴例(第3図23)、沈線のものでは西園遺跡第2号竪穴例<sup>⑮</sup>があげられる。共伴する壺は、西園例(第3図21)では明らかに口縁端部を上方に拡張しており、複合口縁と呼べるものとなっているが、外面には「ハ」の字状文様が施されている。さらに長頸壺(第3図26)も共伴しており、扁平な体部に平底をなすものである。また、田代東原遺跡第1号竪穴でも2-1沈線甕(第3図24)が、北部九州系の複合口縁壺(第3図27)と共伴で出土している。その壺は、わずかに内湾きみの口縁部で屈曲部に明瞭な稜を有し、短い頸部から倒卵形の胴部へ、そしてレンズ状の底部へとつながる。頸部には三角突帯を、そして胴部には台形に近い突帯を一条巡らせている。

次に頸部のくびれの大きい2-1突帯甕では桑木遺跡E地区竪穴出土のものがあげられる。壺(第3図28・29)は口縁部が上

方に長く伸び、外面には櫛描波状文が施されている。櫛描波状文は、中流域の資料等から見て、既に2—1突帯甕（古）の段階には出現している事が考えられる。即ち、2—1突帯甕（古）の段階では「ハ」の字状文様と櫛描波状文が共に用いられていたと思われる、2—1突帯甕（新）の段階は完全に「ハ」の字状文様の消滅した時期とする事ができよう。

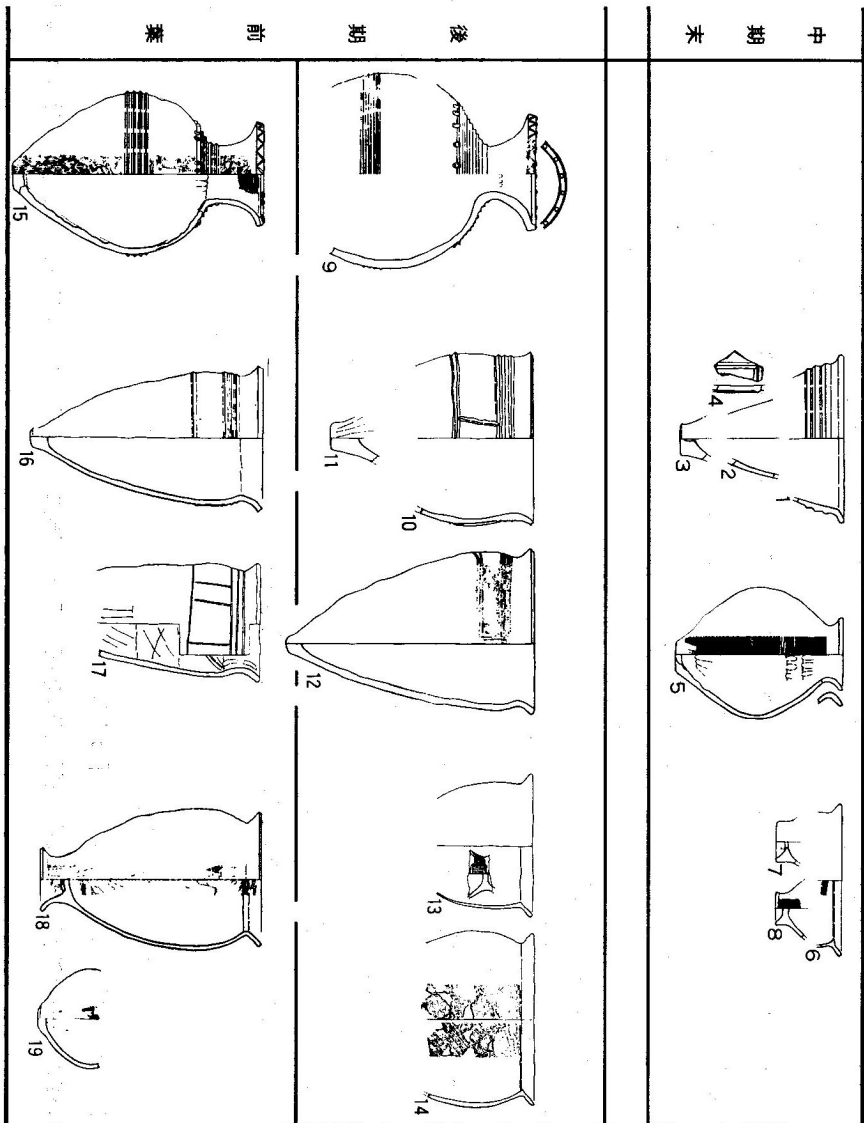
### 他地域との並行関係について

最後に、外来系土器との関係を考えてみたい。当地域では、中期から肥後型の土器が目立ち、大部分胎土等から持ち込みの可能性があるようである。これらの土器群は、当地域の編年と照らし合わせた場合、型式学的に無理なく流れがおえる事が既に玉永氏により指摘されており、豊後と肥後両地域の並行関係を考える場合の指標となり得る。第3図13は在地の土器の共伴資料は知られていないが、口縁部内面がわずかに凹み、内面へ若干突出が見られ、さらに最大径を口縁部に持つなど鬚鬚式土器との連続性が追える。3—1突帯甕（新）との共伴資料である第3図18は、口径よりわずかに胴部径が上まわり、口縁部が直線的に「く」の字に折れる等、13に後続する要素を持つ。13・18とも高木氏の津袋I期に属すと考えられるが、時間的に先後関係を持つととらえられる。2—1突帯甕との共伴資料は今のところ知られていないが、今回はふれなかったが、1—1突帯甕の時期に、タタキが見られ胴部最大径を中位に持つ甕があり、津袋II期でも新しい時期に位置付けられる。即ち、津袋I期と3—1突帯甕の時期、津袋II期と2—1、1—1突帯甕の時期の並行関係を考えておきたい。

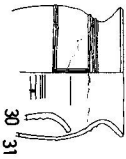
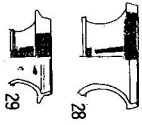
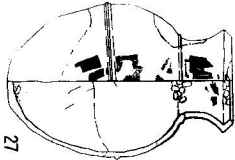
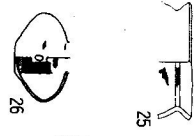
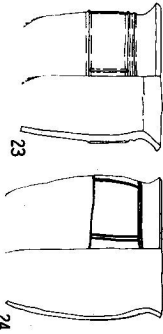
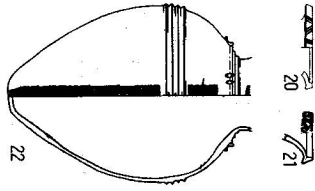
また、北部九州系の土器も後期になって見られるようになるが、量的には少ない。武末氏の北部九州の編年によると14の甕はI期でも新しい時期に位置付けられそうである。27の壺は武末氏の複合口縁壺分類のBI類に属すが、口縁部以外の要素から見た場合やや古い感じがする。即ち、資料的に少なく充分ではないが、北部九州I・II期と3—1突帯甕、2—1突帯甕の時期のそれぞれの並行関係を考えておきたい。

以上のように、3—1突帯甕の一群と、2—1突帯甕の一群には、共伴する壺や他の器種においても型式差を認める事がで





後 期 中



- 1~8 石井入口遺跡第0号型穴
- 9・12 古賀遺跡E区第1号型穴
- 10・11・14 中山遺跡第14号型穴
- 13 西福寺遺跡
- 15 田頭遺跡第1号型穴
- 16・18・19 平井遺跡M区1号型穴
- 17 小面遺跡
- 20・23・25 田代東原第5号型穴
- 21・26 西園遺跡第3号型穴
- 22 西園遺跡第3号型穴
- 24・27 田代東原遺跡第1号型穴
- 28~31 桑木遺跡E区型穴

第3図 土器 編年表

き、また、北部九州や肥後における編年とも矛盾するものでなく、それぞれを後期前葉、中葉として位置付けておきたい。

## まとめ

当地域は、後期に比べ前・中期の資料が少なく、今回後期の前段階としての前・中期のあり方を必ずしも明確になし得なかった。しかし、当地域の後期土器を代表する工字突帯粗製甕は、中期にまで当地域において系譜をたどれる可能性がある事は明らかとなった。けれども、複合口縁壺の系譜については、今のところ、上流域では後期になって明確化したと考えられ、中・下流域からさらに東九州の沿岸部を考慮に入れれば解決できない問題である。上流域の後期社会の成立を考える上で重要なポイントとなる。

後期に関しては、工字突帯文粗製甕の型式変化と、複合（肥厚）口縁壺との組み合わせを指標とし、その前半の編年を行なった。結果的に、芝氏のⅠ期とⅡ期<sup>a</sup>を初頭、前葉に、Ⅱ<sup>b</sup>・Ⅱ期<sup>c</sup>を既中葉に編年する事になった。

今後、甕・壺以外の器種、特に高坏や器台等がほとんど出土しない意味や、工字突帯文粗製甕の分布によって示される地域の意味など、集落・鏡・鉄器等の問題と合わせ、この地域の社会の様相を考える上で重要な鍵となろう。

最後になったが、玉永光洋氏、芝徹氏をはじめ、文化課の諸兄には御指導をいただき、感謝申し上げます。

註① 竹田市に関しては『菅生台地と周辺の遺跡Ⅰ～Ⅸ』（竹田市教育委員会）、荻町に関しては『荻台地の遺跡Ⅰ～Ⅷ』（荻町教育委員会）において調査の概要が明らかにされている。

② 羽田野光洋「東九州における弥生式土器研究Ⅰ」「古文化談叢」第5集 一九七八年

③ 高橋徹「破棄された鏡片」「古文化談叢」第6集 一九七九年

④ 北郷泰道「祖母・傾山系山岳地域論序説」「考古学研究」第25巻3号 一九七八年

⑤ 『菅生台地と周辺の遺跡』Ⅶ・Ⅷ、竹田市教育委員会 一九八一・八二年

⑥ 『太田原遺跡』竹田市教育委員会 一九八三年

⑦ 『大分県史・先史編Ⅰ』大分県 一九八三年

⑧ 高橋徹「東九州における突帯文土器とその周辺」『古文化談叢』第12集 一九八三年

⑨ 西 健一郎「熊本県における弥生中期甕棺編年の予察」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 一九八三年

⑩ 「近中遺跡」『大野原の遺跡』大野町教育委員会 一九八〇年

⑪ 中流域の代表的遺跡である二本木遺跡においても、ほとんど出土していない。現在までのところ、大飼町舞田原遺跡で出土しているのが最も大野川を下る例である。（舞田原遺跡については城戸誠氏の御指示による。）

⑫ 註4と同じ

⑬ 『荻台地の遺跡』荻町教育委員会 一九八三年

⑭ 『竹田地区遺跡群発掘調査概要』竹田市教育委員会 一九八二年

⑮ 『菅生台地と周辺の遺跡』Ⅰ 竹田市教育委員会 一九七六年

⑯ 『菅生台地と周辺の遺跡』Ⅶ 竹田市教育委員会 一九八三年

⑰ 『荻台地の遺跡』Ⅳ 荻町教育委員会 一九七九年

⑱ 『荻台地の遺跡』Ⅴ 荻町教育委員会 一九八〇年

⑲ 『田代東原・塚園遺跡調査概報』竹田市教育委員会 一九八三年

⑳ 註14と同じ

㉑ 『荻台地の遺跡』Ⅵ 荻町教育委員会 一九八一年

㉒ 玉永氏のⅡ期古段階（「二本木・松木遺跡を中心とした出土土器の編年（案）」『大野原の遺跡』）に、「Ⅷ」の字文様と共に一〇数条の波状文を施すものがある。形状からみて、共伴するものとみて良からう。

㉓ 玉永光洋「豊後における肥後型土器について」『九州考古学』第57号 一九八二年

②4 高木正文「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集 一九七九年

②5 武末純一「遺物の検討(1)弥生土器」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XIX 一九七七年

②6 武末純一「北九州における弥生時代の複合口縁壺」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』一九八二年

〔追記〕 荻町鳩ノ原遺跡において、水平より若干内傾する程度の短い口縁部を持ち、突帯は四本で、外面に雑な磨きを施した粗製甕が竪穴から出土した事を知った。(高橋信武氏御教示) 高橋氏の御好意で実見したところ、その甕は、筆者が表採資料等から粗製甕の成立を考えた時に最も古く位置付けた太田原遺跡の表採資料に近く、共伴の肥後系の甕から、中期中葉以後葉に位置付けられそうである。これによって、さらに粗製甕の出現をさかのぼらせる事ができるようになった。

稿了 昭和60年3月8日

(大分県教育庁管理部文化課主事・)

## 豊後大友氏の

増訂  
研究 渡辺澄夫著 ■新版完成

謎の多い初代能直以来の大友氏の歴史に科学のメスを加えた初版に新たな論文を増補した著者二十余年間の研究の結晶。八初版御講読の方は、誤植・誤脱がありましたので無料でお取替えます。当社までお申し出くださいV.A.5・定価三八〇〇円

〒810 福岡市中央区大手門3-1-5-14

電(092) 741-6006

第一法規 九州支社

大分県地方史料叢書(七)

「縣治概略」(I)

「縣治概略」(II)

大分県成立以来の布告・達を集大成した  
県草創期を知る基本史料

(会員各二五〇〇円、会員外各三〇〇〇円)

発行者 大分県地方史研究会